

ソロモンの歌

トニ・モリスン 金田眞澄 訳



SONG OF SOLOMON

ソロモンの歌

トニ・モリスン
金田真澄訳



Hayakawa Novels

SONG OF SOLOMON

by Toni Morrison

Copyright © 1977

by Toni Morrison

First published 1980 in Japan

by Hayakawa Publishing, Inc.

This book is published in Japan

by direct arrangement with

Deborah Rogers Ltd.

検 印

廃 止

ソロモンの歌

昭和55年2月15日 初版発行

著 者 トニ・モリスン

訳 者 金 田 眞 澄

発行者 早 川 清

発行所 株式会社 早川書房

東京都千代田区神田多町2-2

電話 東京(254)1551(代)

振替 東京・6-47799

印刷 中央精版印刷株式会社

製本 中央精版印刷株式会社

定価 1700円

0097-902880-6942

ソ
ロ
モ
ン
の
歌

日本語版翻訳権独占
早川書房

© 1980 Hayakawa Publishing, Inc.

2000

父たちは飛翔し

子らはその名を知らん

第一部

第一章

ノース・カロライナ相互生命保険会社の集金人が、三時にマーシーからスベリオル湖の向う側まで飛ぶことを予告した。事件が起こる二日前に、彼は自分の住んでいる小さな黄色い家の戸口に、次のような貼り紙を出した。

一九三二年二月十八日、水曜日、午後三時に、わたしはマーシーから飛び立って自分の翼で飛び去ります。どうかわたしのことを許してください。わたしは皆さんを愛しています。

(署名) ロバート・スミス

保険集金人

スミス氏の出発には、四年前のリンドバーグのときほど多くの人々は集まらなかった——姿を見せたのはせいぜい

四、五十人足らず——それというのもスミス氏が発券するのに選んだその水曜日の、朝の十一時になるまでは、誰一人としてその貼り紙を読んだ者はなかったからである。週の半ばの水曜日のそんな時刻には、口伝えのニュースの広まるのはいかにも遅かった。子供たちは学校にいつているし、男たちは仕事に出かけていた。そして女たちのほとんどは、肉屋がどんなしつぽやはらわたを只でくれるか見にいかうと、コルセットを締めて身支度をしているところであつた。ただ仕事のない者たち、自家営業の者たち、それにごく幼い子供たちだけがその光景を目撃することができた——噂を聞きつけてわざわざ見に来た者もあつたし、ちょうどその瞬間に、ノット・ドクター・ストリートの湖畔寄りのはずれをたまたま歩いていて、偶然見ることのできた者もいた。このノット・ドクター・ストリートというのは郵便局が認めていない名前であつた。町の地図にはこの通りはメインズ・アヴェニューと記載されていたが、ここはこの市でただ一人の黒人医師が暮らし、また死んだ通りであつた。そして一八九六年にその医師がここに引越してきたとき、彼の患者たちはこの通りをドクター・ストリートと呼ぶようになったのである。患者たちの中にはこの通りや、その近くに住んでいる者は一人もなかった。後になつて他の黒人たちもここに移り住み、郵便が通信の手段

として黒人たちの間で盛んに利用されるようになる、ル
イジアナ、ヴァージニア、アラバマ、またジョージアなど
各州から、ドクター・ストリートの番地に住む人々に宛て
た封書が届きはじめた。郵便局ではこれらの手紙は返送す
るか、配達不能郵便物課に回した。それから一九一八年に
黒人男子も徴兵を受けていた頃、徴兵局で自分の住所をド
クター・ストリートだと述べる者たちも二、三出てきた。

こうしてこの名前は準公認の地位を獲得したのである。し
かし、それも長いことではなかった。もっともらしい名前
と市の境界標の維持を、自分たちの政治生活の主要な関心
事とする何人かの市会議員が、“ドクター・ストリート”
という名前が公式にはどのような場合にも、絶対に使われ
ないように画策したのである。そして、まだこの名前を使
用しているのは南側の住民たちだけであることを知って
いたので、これらの議員たちは市のその区域の商店や理髪
店、またレストランなどに掲示を出させ、湖に面した湖岸
ロードから、ペンシルヴェニアに通ずる六号線と二号線の
接合点まで南北に走り、またラザフォード・アヴェニュー
とブロードウェイの中間を、この二つの街路と並行して走
っている通りは、これまでずっとメインズ・アヴェニュー
と呼ばれてきたし、今後ともそう呼ばれるはずであって、ド
クター・ストリートではない（ノット・ドクター・ストリ

ート）ということを告示させた。

これはほんとうに気の利いた告示であった。というのは
これによって南側の住民たちは、彼らの想い出を生き生
きと保ち、しかも市会議員たちをも満足させる方法を見
つけたからである。彼らはこの通りをノット・ドクター・ス
トリートと呼ぶようになったのだ。そして、この通りの北
側のはずれにある慈善病院のことを、彼らはノウ・マーシ
ー（無慈悲）病院と呼ぶことを好んだ。一九三一年の、ス
ミス氏がこの病院の小丸屋根から飛んだ日の翌日まで、黒
人の妊婦で、この病院の入口の上り段ではなく共同病室で
出産することを許された者は一人もなかったからである。
出産を許された最初の妊婦に病院が寛大であったのは、こ
の女性が今述べた黒人医師の一人娘だったからではない。
開業中この黒人医師が、患者を入院させる恩典を与えられ
たことは一度もなく、マーシーに入院を許可された、たつ
た二人の彼の患者はどちらも白人であった。それに一九三
一年には、この医師はすでに世を去って久しかった。病院
の関係者がこの女性の入院を許可したのは、スミス氏が病
院の屋根から、彼らの頭越しに飛び降りたからにちがいな
い。いずれにせよ、この小柄な保険会社の集金人の、自分
は飛べるのだという信念が、この女性の出産の場所を決め
る原因となったかどうかはともかくとして、出産の時期を

決定したことは確かである。

スミス氏が胸の前のほうに、幅の広い、青い絹でできた翼をたわませながら、予告通り敏捷に小丸屋根キユーボラのうしろから出てくるのを見ると、亡くなった医師の娘は蔽いをした一ベック・バスケット（ハ一ベックはハ・リットル）を取り落とし、びろうどで作った赤いばらの花びらをこぼした。風がその花びらをあたりに、通りの上手や下手に、また小さな雪の山の中に吹き散らした。まだ大人にはなりきっていない、この女性の娘たちがそれを拾おうとして走り回り、一方、母親は呻き声をあげて下腹部を押さえた。ばらの花びらを追って走り回る娘たちの姿は多くの人々の注目を集めたが、妊婦の呻き声に気づいた者は少なかった。少女たちが何時間もかけてその高価なびろうどに下絵を写し、切り抜き、そしてかがったこと、またゲアハートのデパートでは、汚れた製品はどんなものでも、すぐに不合格にすることを誰も知っていた。

しばらくそこで派手な場面が展開された。男たちも一緒になって、花びらに雪がしみ込まないうちに拾い集めようと手を貸し、突風に吹き飛ばされそうになるのをひたたくり取ったり、雪の中からそっと摘みあげたりした。そしてごく幼い子供たちは、屋根の上の青い絹を身にまとった男を見たものか、それとも地面に散乱している赤い花びらを

見たものか、心を決めかねていた。子供たちのこのジレンマは、一人の女性が突然大声で歌いはじめたときに解決された。群衆のうしろに立って歌っているその女性は、医師の娘の身なりのりっぱさとは対照的に、ひどくみすぼらしい服装をしていた。医師の娘はきちんとしたグレーのコートを羽織り、伝統的な妊婦のやり方に従ってベルトを腹部の真中で蝶結びにし、黒い釣鐘形の帽子をかぶり、四つボタンの婦人用オーバーシューズをはいていた。歌っている女性のほう編んだ海軍帽をまぶかにかぶり、冬のコートではなく、古い刺し子の上掛けに身を包んでいた。首を一方にかしげ、じつとロバート・スミス氏に眼を据えて、その女性は力強いコントラルトで歌った。

ああ、シュガマンは飛んでいった

シュガマンはいってしまった

シュガマンは空を突っ切っていった

シュガマンは故郷に帰った……

そこに集まった五十人くらいの群衆のうちの何人かは、こっそりとつき合ってはくすくす笑った。まるでその歌が無声映画の理解を助け、意味をはっきりさせてくれるピアノ曲でもあるみたいに、じつと耳を傾ける者たちも

いた。みんなはしばらくそうして立っていたが、スミス氏に声をかける者は誰もなかった。病院の人間たちが出てくるまで、彼らはみんな自分たちの周囲で起こっているのちよっとした二つの事件の、どちらか一方に心を奪われていた。

病院の者たちは窓から見ていたのだった——最初は軽いい好奇心からだったが、やがて群衆の数が膨れあがって、病院の塀までも迫ってくるように見えはじめると、不安の念をもつて見守っていたのだ。黒人の地位向上を主張する団体がいつも組織しているような騒ぎが、起ころうとしているのではないかと思ったのだ。けれどもブラカードもスビーカーもないのを見ると、彼らは思いきつて外の寒さの中に出てきた。白い手術衣を羽織った外科医、黒っぽい上着の事務職員や人事職員、それに糊の利いた看護服に身を包んだ三人の看護婦だった。

スミス氏と彼の着けている幅の広い青い翼を見ると、彼らは数秒の間その場に立ちすくんだ。女性の歌を聞き、撒き散らされているばらの花びらを見たときもそうだった。

ちよっとの間、おそらくこれは何か宗教の一種だろうと思つた者たちもいた。聖なる父（フアザー・デイヴィン）（一八八七?—一九六五年、一九三〇年頃には多くの信者を集めていた。一九四二年にフィラデルフィアに本部を移す。信者のほとんどは黒人であったが、彼のことは神と信じ）が勢力を揮っているフィラデルフィアは、それは

ど遠く離れているわけではなかった。たぶん、ばらの花びらの入ったバスケットを持った少女たちは、彼に仕える処女たちのうちの二人なのだろう。しかし金歯をはめた一人の男の笑い声で彼らは我に返った。彼らは白昼夢に耽ることをやめて素早く仕事に取りかかり、あれこれと命令をくだした。彼らが大声をあげて忙しく動き回ったために、さっきまではただ二、三の男と数人の少女たちがびろうどの花びらを追いかけて、一人の女性が歌っていただけの場所は、たいへんな混乱になった。

看護婦の一人がこの混乱を少し整理したいと思って周囲の者たちの顔を見回し、その気になれば地球でも動かせるうながしりした女性を見つけた。

「ちよっと」と看護婦はそのがっしりした女性に近づいて言った。「この子たち、あなたの子供?」

がっしりした女性には自分にかけられた言葉のぞんざいさに眉をつりあげ、ゆっくりと首を回した。それから声の主が誰だかわかると、眉をおろし、眼に浮かんだ怒りの色を隠した。

「はあ?」

「誰か一人を救急室にやってちょうだい。守衛に急いでここへくるように言わせるの。ほら、その、その子がいいわ。その子よ」看護婦は五、六歳くらいの、猫のよう

な眼をした男の子を指差した。

がっしりした女性は見護婦の指の方向に視線を滑らせ、
看護婦の差している子供を見た。

「ギターです」

「何ですって？」

「ギターです」

看護婦はまるでウェイルズ語でも耳にしたみたい、じつとそれががっしりした女性を見つめた。それから看護婦は口を結び、もう一度その猫のような眼をした子供を眺め、両手の指を組み合わせて、次の言葉はひどくゆっくりした口調で、その子供に話しかけた。

「ねえ、いい？ 病院の裏の守衛室にいくの。ドアに

「エアー・エンジン・アドミツションズ」

救急患者入口」と書いてあるわ。A・D・M・I

・S・I・O・N・Sよ。でも守衛がいるわ。その人にすぐここにくるように言うの。さあ、いって。さあ！」看護婦は組んでいた指をほどき、両手ですくうような動作をして、手の平で冬の空気を押しやった。

茶色の背広を着た男が小さな雲のように白い息を吐きながら、看護婦のところに近寄ってきた。「消防車がやってくる。中に戻りなさい。凍え死んでしまおうよ」

看護婦はうなずいた。

「Sを一つ抜かしたよ、おばさん」

(看護婦がSADMISSI
ONSのSを一つしか言

わなかったことを指)と男の子が言った。北部はこの子供には
摘しているのである)初めてで、白人にも遠慮なく口が利けることを彼はちやうど
知りはじめたばかりであった。けれども看護婦はもうす
でに、寒さをまぎらわそうとして両腕をこすりながら、そ
の場を去ってしまった。

「おばあちゃん、あの人Sを一つ抜かしたよ」

「それから「すみません」って、という言葉もね」

「おばあちゃん、あの人飛ぶと思う？」

「気違いはどんなことだってするさ」

「あの人誰なの？」

「保険の集金人だよ。気違いだよ」

「あの歌をうたっている女の人は誰？」

「あれはね、坊や、季節最後のえんどう豆さ」しかし彼女は歌っている女性に眼をやったとき微笑を浮かべた。そこで猫のような眼をした男の子は、病院の屋根の上で翼をばたばたさせている男に夢中になっているのと少くとも同じ程度の興味をもって、その独唱に耳を傾けた。

今や警察が呼ばれようとしていたので、群衆はすこしばかりそわそわしはじめていた。彼らはそれぞれスミス氏を知っていた。スミス氏は月に二度みんなの家にきて、一ドル六十八セントを徴収し、小さな黄色いカードに日付と、週八十四セントの払い込み金額を書き込んでいくのだった。

みんなはいつも半月くらいは支払いが遅れていた。そのくせ絶えずスミス氏に先払いしようと言うのだった——まず最初に、スミス氏がついこの間きたばかりなのにと文句をつけた後で。

「もうやってきたんかい？　ついさつき払ったばかりみたいな気がするぜ」

「お前さんの顔を見るのはもううんざりだよ。つくづくうんざりしたよ」

「わかってたよ。十セント銀貨を二枚重ね合わせたと思うと、とたんにお前さんがやってくるってわけだ。死神よりも、もつときちんきちんとね。フーヴァー（ハーバート・ク九年から三三年まで米大統領）はお前さんのことを知ってるのかね？」

みんなはスミス氏をからかい、口汚くののしり、子供たちを使ってスミス氏に、自分は留守だとか、病気だとか、ピッツバーグにいったとか言わせたりした。そのくせ彼らはその小さな黄色いカードに、まるでそのカードに何かの意味でもあるみたいに、しがみついていた——家賃の領収書や結婚許可証、また期限の切れた工場の認識票などと一緒に、靴箱の中にそっとしまい込んでいたのだ。スミス氏は何を言われてもただにこにことして、ほとんどずっと客の足ばかりに眼を向けていた。彼は仕事の関係で背広を着ていたが、しかし住んでいる家は、客たちのものと変

わるところはなかった。客たちの誰かが知っている女性とスミス氏が交際していたことは一度もなかったし、教会では時折「アーメン」と言う以外は、一言も口を利かなかった。スミス氏が誰かをなぐったりしたことは一度もなかったし、暗くなってから彼を見かけた者もなかった。だから、たぶんスミス氏はりっぱな人間なのだろうとみんなは思っていた。だがスミス氏は病気と死を重苦しく連想させ、そのどちらも、みんなの持っている黄色いカードの裏に印刷された、ノース・カロライナ相互生命保険会社の建物の、黄色い写真と重なり合った。マーシーの屋根から飛ぶというのは、スミス氏がこれまでにやった中では最高に面白いことであつた。スミス氏にそんなことができようなどと思っていた者は誰一人なかった。「こうしてみると人間って奴は、全くわからないもんだな」と彼らはおたがいにささやき合った。

歌っていた女性は声を出すのを止め、ハミングしながら群衆の間を縫って、まだ下腹部を押さえている、ばらの花びらの婦人のほうに近づいた。

「あつたかくしてなきやだめだよ」と彼女は、軽く婦人のひじにさわってささやいた。「朝になればかわいい小鳥、がやってくるよ」

「まあ？」と、ばらの花びらの婦人は言った。「明日の朝